

相星雅子さんを悼む

憲法オネエチヤン



澁谷 繁樹

三畳にも足りない自室の半分を占める寢台に中華人民共和国地図を広げる。寢台の三分の二近くが中国と化す。中国人民解放軍製作の地図には、北海道と銚子半島の東部分が欠けた日本も掲載されている。鹿児島と大連がほぼ千^キ、大連と瀋陽の間が三百^キ、三つの都市は片方の掌と指五本で十分押さえられる距離に位置している。

二〇一九年三月十二日に亡くなった相星雅子さんは一九三七年大連生まれ、四歳で瀋陽（当時の奉天）に移り、一九四六年に鹿児島に引き揚げてくる。

家の祖父母は瀋陽からさらに北へ四百五十^キのハルピンにいた。日本の大学にいた父は学徒動員で幹部候補生を拒否、小倉の頼りない高射砲陣地に兵卒配属され届きもしない弾で米軍機を迎え撃たされていた。近くに落ちた爆弾に吹き飛ばされたり経験はしているにせよ、敗戦は内地で迎えている。祖父母も運に恵まれたのか、引き揚げの苦労話を耳にした覚えはない。

相星さんからは何度か日本まで帰る旅の思い出を聞かされた。南日本文学賞（一九九〇年・第十八回）を小説「下関花嫁」で受賞している作家だから、敗戦引き揚げ行は文章でも結構な分量が残っている。大仰には書かない、悲嘆は沈潜させる、平易を心掛ける書き手は淡く軽く綴っているものの、背景を成す血、涙、汗、呻吟は色濃く立ち上がってくる。

「進駐していたソ連兵士に目をつけられないため、母も手伝い人も髪を刈って男装したこと、水道が出なくなり夕やみにまぎれてリヤカーにバケツを乗せてくみたてに行った光景、少し向こうの戸外の井戸ポンプへ様子を見に行った父の頭上に中国人の男がクワを打ちおろし、危うく避けたが耳のつけ根に深手を負った日のことなどは覚えている」(随筆集「おそれたまえ百万人の隠れ王を」・二〇〇五年刊)

日中の近現代史を両方の国家で実際に嘗めさせられた経験談は個に立脚しながらも同時に普遍性も纏って突き刺さってくる。

「つちかった生活も地位も財産もすべて捨てて、屋根のない貨車に乗ってからの祖国への旅は泥汁とシラミにまみれてどのくらい続いたのだろう。コロ島で乗船してから、いくつもの水葬の気配の中で人々は恐ろしい船

酔いに苦しんだ。船底に転々と転がりながら、私ははじめて天性にして無尽蔵な遊び魂を失っていた」(前同)

一九三一年九月十八日午後二〇時二〇分、瀋陽郊外の柳条湖、南満州鉄道線路で爆発が起き、十五年に及ぶ日中戦争の幕が開く。独断と大風呂敷で鳴らした関東軍の終わりの始まりは、日本では満州事変、中国では九・一八事変と呼ぶ。爆発現場には歴史博物館が建てられ傲慢、残虐な日本を映像や人形で徹底的に叩きつけてくる。相星さんが言うコロ島は遼東半島の大連の対岸の都市で葫蘆島と書き引き揚げの拠点港だった。

七、八歳で絶望を見た相星さんの目は一九四七年五月三日の憲法施行で輝きを取り戻す。「平和と主権在民をうたう画期的な新憲法が生まれた。私の通っていた中洲小学校でも甲南高校の講堂を借りて祝賀の学芸会が行われ、

四年生だった私は施行記念国歌を振り付けたダンスで舞台をふんだ。新しい憲法は血の通う弟のように、子どもだった私たちにしつくりとなじみ、ともに育った。そして三十数年、その弟はいま、出生の秘密を最大のたてにとられ、まっ殺の危機にさらされている。

その時子どもだった私たちが今やるべき急務は、その時大人だった人々へ、その時生まれ ていなかった人々へ、その時の真実を思い出させ、伝えることではないだろうか」(前回)

よみがえる。 入来院家座敷で当主と相星さんが憲法をめぐり対立、ときに声が甲高くなる当主に貞子夫人がやんわり嫺やかに眉を顰め小声で諫め、声色は同じでもいつかな退かない相星さんを「まあまあ」と桐野三郎さんが柔らかく丸く包みこんでいくのを。夏の恒例出し物だった当主雅子論争が消えてからもう何年になるか。 貞子夫人の遺影に手を合わ



酒席でも声は高くない代わりに自説は曲げなかった。右端が相星さん。



相星さんの生まれ故郷大連の旧日本人街は高級住宅地となり、見た目もメニューも高価な河豚店もある。



1600年代には故宮も置かれた瀋陽 中国の餃子の発祥地を自称する餃子屋の焼き餃子。

せていると蝉の声の合間に「んなこと言ってるから社会党は潰れちまうんだ」「アナタ、たいがいのところまで」なにがつぶれているんですか。思想は死なないんですよ」「さてさて、楽しく飲み直しましよか」、それぞれの声が聞こえるだけでなく顔までも見えてくる。

引用させていただいた相星さんの随筆集の著者紹介に元号は出てこない。西暦で統一している。らしいなと思う。憲法を弟と切り切る女性は「憲法オネエちゃん」と呼んでも怒られないはずとも考える。故郷としての思い入れの深さだろう。作品中、瀋陽は奉天と表記、満州も中国東北地方ではなく満州もしくは旧満州と書く。甲子園では郷土勢への傾きは淡泊、五輪でも日本への応援はアツサリ、日本のほかに中国東北地方にも郷愁を抱く人間としての世界観かもしれないと呟く相星さんが最期に見た古里の夢は、どっちだったろ

う、日本か、それとも。
いずれにせよ、今度、大連と瀋陽を訪れたら、最初の一杯は憲法オネエちゃんに捧げるつもりでいる。

(元新聞記者、炉ばたセイ談会会長)

